ロング・インタビュー

イヴォ・ヴァン・ホーヴェ

もっとも個人的で、ユニークで、他者が共感できる作品を創りたい。

本拠とするオランダを含むヨーロッパを始め、英国、南北アメリカ、そしてアジア。
世界中から熱烈オファーが絶えない超人気演出家イヴォ・ヴァン・ホーヴェが、
東京での『オセロー』上演に合わせ来日した。
翌日にはロンドンで新作が開幕するため、滞在はわずか十数時間。
『オセロー』初日のカーテンコールに登場した後、
その舞台上でポートレート撮影に応じながら、ロンドンのスタッフに指示出し。
終わるとスマートフォンのスイッチを切って、インタビューの席に着いた。

IVO VAN HOVE

IVO VAN HOVE

ONE'S *voice*
ゲイゲキ × アイタイヒト

レーヌ・デヴォスは、かなり長い間、この役をつとめていますよ。オセローとイアーゴー役は、初演以来、ずっと同じ俳優が演じ続けています。初演時は、二人とももう少し若かったですけどね（笑）。まあどんな俳優であれ、実年齢は、さほど重要な要素ではないと考えています。

―― 欧米の上演では、オセロー役はアフリカ系の俳優が演じることが多いと思いますが。

必ずしもそうではありません。確かにイングランドではそういう傾向が強いですが、オランダでは、黒人の俳優が登場したのは、だいぶ後になってからのことです。現実問題として、黒人の俳優は長らくいなかったんですよ。私たちの劇団にも、黒人の俳優はいる時もあれば、いない時もある、という状態でした。白人のハンス・ケスティングをオセロー役に起用したのは、私が知る限り、彼が最高の俳優だったから。それが唯一の理由です。今後も、黒人の俳優がオセローを演じることもあるでしょうし、適役の俳優がいれば、黒人ではない人が演じることもあるでしょう。劇場というのは、想像力を働かせる場所です。女性の役を男性が演じるのも、男性の役を女性が演じるのもありですし、農夫の役を、農夫ではない人が演じてもかまいません。ゲイの役を演じる俳優が、ゲイである必要もないのです。

―― 英米に多い「黒人役は黒人俳優が演じるべき」という、ポリティカル・コレクトネス（社会的に公正であること）に基づく発想が旧弊に思えてきます。日本では肌を黒く塗ったりしますし。

最近、この問題はますますセンシティブになってきましたね。ニューヨークやロンドンで仕事をすることが多いので、痛感しています。でも私は、肌の色にとらわれないキャスティングを支持しますし、実際にそうしています。肌の色にとらわれないという考えに、心から賛同するものです。実は私たちのオセローも、初めのうちは肌を黒く塗っていたのですが、やめたんです。もともと、そういうことをするのは好きではなかったし、大切なのは、肌の色が意味しているものは何か、ということですからね。それについては、『オセロー』の劇中のせりふでも言及されています。劇中の言葉が、すべてを説明しているのです。

この作品でも原作通り、オセローは北アフリカ出身としていますが、ニュアンスとしては、いわゆるメディテレーニアン＝地中海沿岸住民という、南ヨーロッパや北アフリカ（モロッコ、チュニジア、アルジェリアなど）、中東の一部を含む地域に住む、褐色の肌を持つ人々のこと、ととらえています。私は専門家ではないので厳密な定義はしかねますが、広い意味では、彼らのことをアラブ人（アラブ系）と言っていいと思います。肌の色も、背負っている文化も、白系ヨーロッパ人とは異なります。ヨーロッパとアラブは、地理的にはとても近いですが、同時に、とても違うと言えるのかもしれません。「彼らのことはよく知っている」などと簡単には言えない、何かがあるのです。「知っている」というのは買い被りで、実は大切なことを、まだよく理解していないのかもしれない。これは、とても複雑な問題です。

この作品を創った後、さらにアラブを取り巻く社会情勢は変動していますから、いま取り組んだら、また変わってくるでしょう。彼らの奥深いところにある「怒り」のようなものが出てくるかも……。いや、でもこの『オセロー』は、オセローとデズデモーナの部屋が舞台前方に動く演出が、ヒッチ・コックの映画みたいで気に入っているんです。音響デザインのマルク・ミュールマンスが選んだPJハーヴェイの曲から思いついたラストシーンも好きだし、やはりどこも変えないと思います。やるとしたら、一からまったく異なる新しい『オセロー』を創るでしょうね。

明日ロンドンで新作が開幕するのに

―― ロンドン・ナショナルシアターの新作『ネットワーク』プレビュー初日の前日に、演出家が現場を遠く離れた東京にいらっしゃるなんて、とても信じられません。

でもなぜか、今ここ、東京にいるんですよね（笑）。もちろん、通常はこういうことは絶対にしませんが、来日は約束したことなので、それを守ったまでです。ロンドンの方とは、今日も『ネットワーク』の脚本家とずっとメールでやり取りしていますし、現地スタッフとも密に連絡が取れているので、大丈夫です。

―― 『オセロー』は、2003年アムステルダムで初演されて以来、さまざまな都市で上演されていますね。

最近の上演は、2014年の台北。そして、2015年のアムステルダムでした。2001年以来、芸術監督をつとめるアムステルダム市立劇場所属の劇団トネールグループでは、これまでに約30作品を創ってきました。それをレパートリーとして自分たちの劇場と、世界各地で上演しているので、こうして長い期間にわたって一本の作品を断続的に上演するのは、私たちにとっては、ごく自然なことです。優秀なリハーサル・ディレクターがいますので、レパートリー作品の上演が決まると彼らを中心に稽古を行い、上演日が近づいてきたら、私自身がチェックする、というシステムができています。一方、新作は、だいたい二年前くらいから計画を立て、随時スタッフと打ち合わせを重ねてゆきます。現在、何本も同時進行している状態ですが、このシステムのおかげで、つねに新作を創り続け、同時に世界中でさまざまな作品を上演することが可能になっています。

―― 今回のデズデモーナ役は、初演時とは別の俳優さんでしょうか。

この役は、二人の俳優によって演じられています。いずれもオランダでは最高レベルの女優で、決して片方が代役なのではなく、デズデモーナ役は二人いる、ということです。今回の東京公演でデズデモーナ役を演じているヘ

演出は、LOVE & HATE

―― 舞台美術と照明のヤン・ヴァースウェイヴェルドさんとは、とても長いコンビですね。

もう30年近く、つねに彼と仕事をしています。私の作品には絶対に欠かせない、クリエイティブ・パートナーです。他の美術家や照明家と組むことですか？ありません。作品に向き合い、どうしたらいいかをヤンと考える。二人で取り組むことで、私の仕事は成り立っているからです。もちろん作品の内容や規模によって、ヤンの舞台美術と照明デザインは、大きく変化します。ミニマルなこともあるし、明日からロンドンで始まる『ネットワーク』のように、大規模で複雑な装置になることもあります。振り幅は、相当大きいと言えますね。

―― ワークショップをやらないというポリシーもあるとか。

はい。ワークショップは嫌いなんです（笑）。ゴールがないように感じてしまってね。ニューヨークでデヴィッド・ボウイの『ラザルス』を上演した時には、求められて例外的に行いましたが、それでも4日間に短縮してもらいました。きっと私は、ワークショップというものが苦手なんだと思います。その重要性は理解していますし、特に若い人たちにとっては非常に有益だということもわかっているのですが、やっていて楽しくない。「演出」をすることだけで、精いっぱいなんです。そして「公演初日はこの日だ！」ということが決まっていないと、何もつくれない質なんです。パートナーのヤンは、ワークショップが得意で、よくやっていますけどね。

―― そうした徹底ぶりは、演出にも反映されていますね。生半可な表現を一切しない印象があります。

そうかもしれませんね。“Love & Hate”。好きか嫌いか。結局はそのどちらかであって、中間は存在しないのです。アメリカで私はこう評されたことがあります。憎らしい愛すべき男または愛すべき憎らしい男。"The man you love to hate or you hate to love."これを読んだ時、とてもうまい表現だと思いましたね。俳優に対しては、極端なことはせず、できるだけ自然に接するように心がけていますよ。一人ひとり違った個性を持っていますから、その個性に応じた接し方をしているつもりです。俳優が抵抗を感じているのに強要するようなことは、ほとんどしません。が、まあ、たまにはありますね。たとえば、ほとんどの俳優は舞台上でヌードになることを嫌がりますが、時と場合によっては、それが必要なこともありますから。

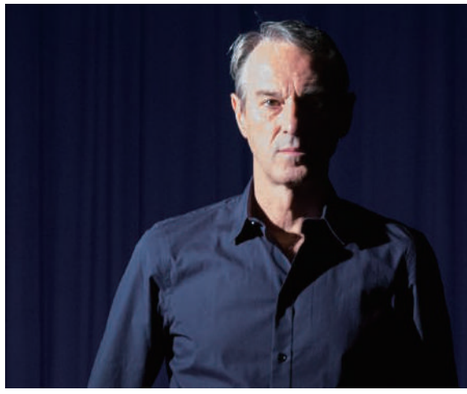
『オセロー』のデズデモーナ殺しのシーンで二人が裸なのは、一般的に愛し合っている夫婦の寝室でのありかたを示していることに加え、特別な意味も込めています。すなわち、岩のように巨大な男が、仔羊のようにいたいけな妻を殺してしまう。彼女は逃げようとしますが、どこにも逃げ場はありません。私はこのシーンを、現実離れしたイメージにしたいと考えました。壁一面の大きさに描かれたルネッサンス期の絵画のように、巨大な英雄が殺戮におよぶようなビジュアルにしたかったのです。もちろん、こうしたことは俳優にとっては繊細な問題だと思います。ですから、その人の深い傷に触れてしまうような状況を招くことには、敏感でありたいと思っています。しかし同時に、限界ギリギリまでは押し上げ、突きつめたいとも思っています。私の人生におけるゴールは、もっとも個人的で、もっともユニークで、もっとも他者が共感できる作品を創ること。いつもそう思って作品に取り組んでいますが、まだ実現できてはいませんね。

―― ぜひまた、東京で作品を上演してください。

もちろんです。なにせ30作品はありますから（笑）。まだ東京では、私たちはあまりよく知られていない存在ですし、私たちも、日本の観客のみなさんのことを、もっと知る時間が必要でしょう。次回はもう少し、東京に長く滞在しないといけませんね。

取材・文：伊達なつめ（演劇ジャーナリスト）
通訳：角田美千代　写真：渡部孝弘

『オセロー』舞台写真　©Jan Versweyveld



イヴォ・ヴァン・ホーヴェ　IVO VAN HOVE

1958年ベルギー生まれ。1981年より演出家として活動を開始し、2001年トネールグループ・アムステルダムの芸術監督に就任。演劇をはじめミュージカル、オペラ、映画、テレビドラマと演出作品は多岐にわたる。2015年『橋からの眺め』でローレンス・オリヴィエ賞最優秀演出賞受賞、トニー賞・演劇演出賞受賞。代表作として、デヴィッド・ボウイの楽曲による音楽劇『ラザルス』、ジュリエット・ビノシュ主演『アンティゴネ』、ジュード・ロウ主演『郵便配達は二度ベルを鳴らす』など。世界の舞台芸術シーンをリードする演出家の一人として大きな注目を浴び続けている。

トネールグループ・アムステルダム　Toneelgroep Amsterdam

1987年アムステルダムを拠点に設立されたオランダ最大規模の劇団のひとつ。2001年からイヴォ・ヴァン・ホーヴェが芸術監督を務める。シェイクスピア作『じゃじゃ馬ならし』(2009年にSPACが招聘)、トニー・クシュナー作『エンジェルス・イン・アメリカ』、ジャン・コクトー作『人間の声』、モリエール作『守銭奴』、イングマール・ベルイマン映画の舞台版『叫びとささやき』『リハーサルの後で』『ある結婚の風景』『ペルソナ』、ジョン・カサヴェテス映画の舞台化『ハズバンズ』『オープニング・ナイト』など、数々の意欲作を世界中で上演している。